

太
郎
兵
衛
水
掛
論

種
蒔
權
兵
衛
の

後
継

服
部
應
賀
著

定
價
三
匁



官許明治七年十一月八日



味

太郎兵衛水掛論

服部應賀著

種蒔權兵衛の長男。太郎兵衛なる者の迂遠の
 学文を好む唯家業の道と主とす。是は高王の
 四百余州を奔走して八年旅寓あり。我家の
 門前を三度通行せしむ。寸陰を惜みて一度も家へ
 立ちし。海川沼溝田畑の水利を通ぜし仁意を
 追ひん。用水悪水の便利を開き下田を上田小為

の委まかしきいの所謂い智者ちの水みづを以もつてたのしむの意い不ふ
よるや父ちちの種たね蒔まのな名な高たかく子この為ため事こと成な業わざ不ふ皆みな
水みづ掛かのな名なを採とハ農いん家かといへども又一いつ奇き之しされば過あま
年とし家か僕べ不ふ小こ作さくを命めいトハ驛えき路ろ不ふ家か作さくと建たりけり
間まもろく其家作類そのかさく焼やせしむへ太郎兵工たろうべいこう父ちち不ふ又また家か
作さくを促うながしけり父ちちの疾は不ふ家か作さく料りょう渡わたせば再また々々
せむと云い。太郎兵工たろうべいこう云い其家作料そのかさくりょう渠かれが身み不ふ付つるハ
有あるれども焼や失しせむは是こゝ無なるとの論ろん判はん數すう日にち
不ふ及および近隣きんりんの者もの此論このろんを聞きて權けん兵工べいこう太郎兵工たろうべいこうの

水みづ掛か論ろんと言いても宜あたきと云い太郎兵工たろうべいこう父ちち不ふ迫せまり
りハ原はら無なの処ところへ父ちち有ある家作かさくをしむ無なとみれば原はら
の無なありと理り解かいして家作かさくを元もとの如ごとく營えいせけり
日ひを重おもて此隣このりんの酒喰さけく屋やより培こ糞やしの臭にお不ふ万まん客かく追お々々
減へる家業かぎふの妨さまたるれハ夫それを除のぞくとの使つかをよこせ是こゝ是こゝ
不ふ驚おどき太郎兵工たろうべいこう方かたへ来きて云い々々せりハ太郎兵工たろうべいこう一いつ
筆ひを志したてめて是こゝを以もつて答こたよと渡わたせば是こゝハい
る答こたと聞きがゆへ夫それハ隣りんの弦歌げんか夜々よ喧わ々々して
寢ねまじむ。夫それも農業のうぎふの妨さまたるれハ家業かぎふ同断どうだんの妨さまたる

定二天作おき不ふ算さん當とうあるべしとの答こたへといへば。小
作せうさく男おとこよろあびいさんで隣かたへ送りし其その後のち何なにの
沙汰さたもあし是こゝを聞き者もの又また太郎兵工たうらうへいこうの水みづ搦な論ろんと
いふ都すべて近邊ちかばた不ふ口くち論ろんといふまはるまはるるがおのへ非ひを
判はんをさままといふは其その坐まふる論ろんの非ひをあらわるるがおのへ非ひを
火ひ不ふかへて火かを消おのろ水みづをかけるのう上うへみけるは太郎
兵工へいこう水みづ搦な論ろんのな名な弥や高たかし既すで不ふ今いま日ひ父ちちより先まへ山
田やまへ行いて水みづ車ぐるまの用もちをあはらせ父ちちの来きたるを遅おそきは浅
俣あしなしけるは古ふる院いんの学がく社しゃ不ふ居ゐるとき水みづ車ぐるまをかかへて

戻もどりたがう学がく社しゃ不ふいふまはる群ぐん集しゆの者もの大だい殿てん不ふあ
ふま父ちちと村むら長ながとの舌かた争ま志しをあらわるるは人ひとうげ
不ふ忍しのむは伺うかひける不ふ一ひと個この歌うた舞ま者もの上うへ坐まへまさみん
時とき勢せい断た然ぜんの言ことをあらわるるをあらわるるよりつづく上うへ金かねをあらわるる者
あらわるは是こゝを納いれらる猶なほ我われ父ちち教しよ訓くんをあらわるるいろろめきら
るを見みて太たう郎らう兵へい工こう忍しのむはねん群ぐん躰たいの稻い庭ぢやうをあらわるる
けつ上うへ坐まふはいたり村むら長なが不ふ一ひと礼らいし父ちち不ふ云いひます
唯ただ今いま歌うた舞ま者もの某たれが芳よし言ことをあらわるる聞きれるは賤せん業ごうの
中なより人ひとの性せい善ぜんをあらわるる時とき況げん不ふ靡ひをあらわるる是こゝ

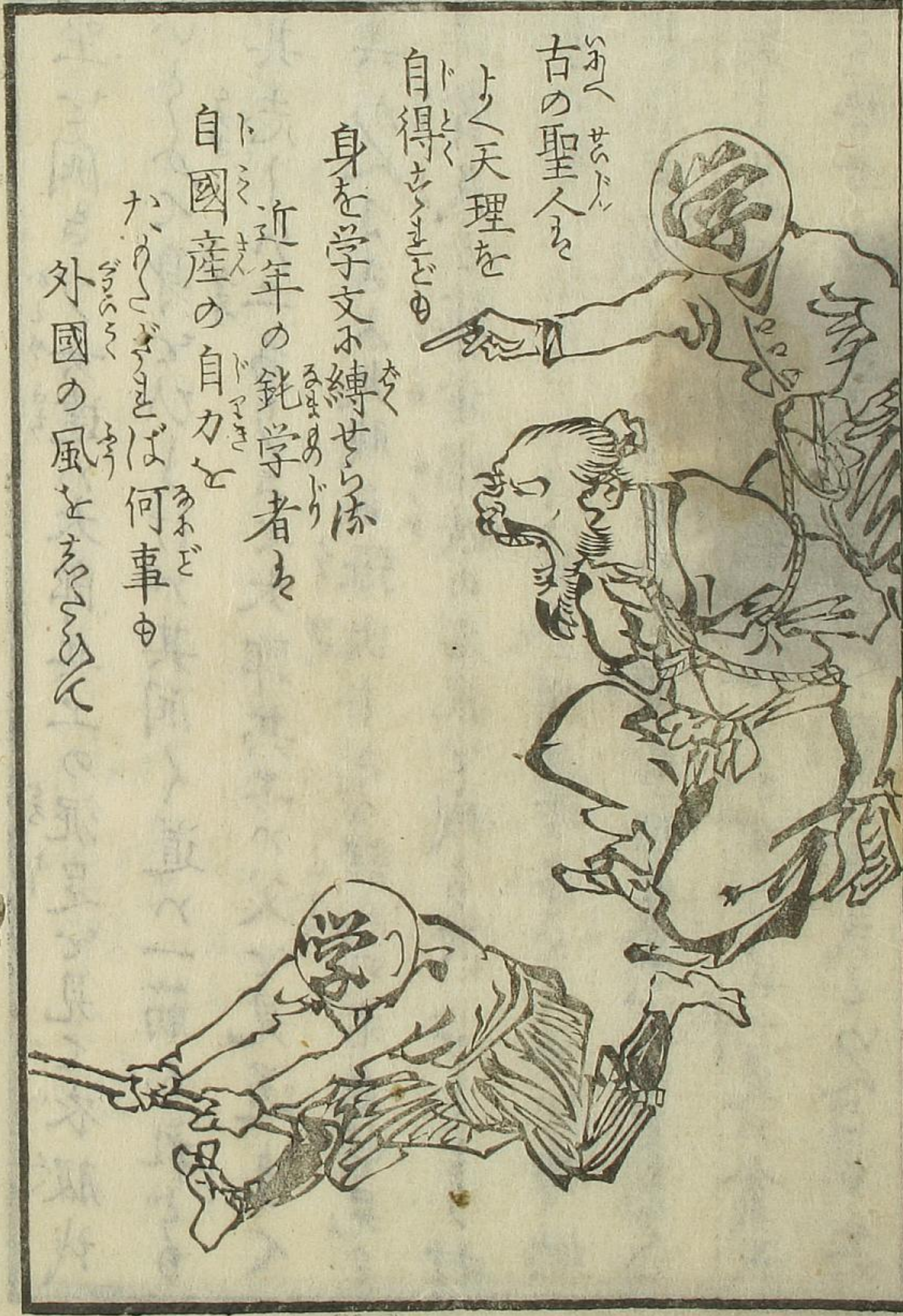
塵埃の玉泥中の蓮ともいふべしかゝる貴人
たるを知て老躰の古習を弁論するところ
今此大殿を見よとせば耆嫗童男婦女多し
荆棘淫肆の譬の馬耳風なる吾不肖といへども其
人に見て教を解の志あるを偏し吾を以て名代
たりしめ早く新田におもむき人夫を耕耘
の差配おれ疾水路の洩せたりといふより村長
も其儀然るべしといへば權兵衛一統へ會訊し
て立去けしを有志の者の渠が徳實を敬ひて

坐を閑き少女達の太郎兵衛の泥足を見て衣服
いとゆる身はひくけが其閑く道の一筋おれども
其志しき二ありさて太郎兵衛の父を見送りて
其かへるさ小大殿お張出したる諸人の名前を見
け貧民と藝者娼妓の名札を残らばへがしり村
長の前へ差出して云や「我此者等が上金を弁納
するがゆへ彼等ハ信志の衣褒られて金貨のそとへ
戻しぬ」と述ぶが村長名札をかぞへて「是ハ貧民
と藝者娼妓の名のこあるが譬へ貧民といへども其



吾國律に繫縛の
 索あるを切の
 ろゞは夫を
 自身の自由と
 誇化人何とば
 古聖の
 縛を解て
 其索も
 渠を縛する
 者わは是を
 双明の天吏と
 いふ也

性暗者



古の聖人も
 よく天理を
 自得せよ
 身を学文に縛せらば
 近年の鈍学者も
 自國産の自力を
 何事由
 外國の風を志すも
 何事由

心より出た信を戻さずかへつて不仁のいなり既し印
 度ふての貧女施物とさるものみけむい髪を鬻ぐ信
 施とを「否。吾ふあるは是を納げ其由はそ由 艱寡
 孤獨の身であうせむ才一ふ。妻ふこくもて便あく世こ
 ころ業もみき中ふ子を育むを艱といふ。才二夫ふとあむ
 子といふさ 饑のたぬを寡とぞいふ。才三世ふ拙るく
 早く父母ふこくも身のおき処るさ男を孤といふ。才四
 年老て業もあむぬふ養ふ子もあく露命ふせまう
 者と獨といふ。世ふ憐るる者此上ふはみけむい時義

賊
理ニア
タラヌ
財ヲ云

ふよのての苦ふ苦をかさねるともあらん 扱藝者 旋
 女も皆貧民より出る者もむたたらん 官の許印を
 持むとん 是正業ふあうさうのを神佛祭事ふ促
 されん 貧苦の中の出金を笑ふて出た者もあり 又祐
 福の且那或の客より出ふもせよ 清くぬ 賊の如き
 修身 沙家の基礎とさる此学社ふ我の納む。雅君印
 度の貧女とさるが 印度ふさる 長者の施金不浄に
 して 精舎の焼亡一例あり 其一を志つて 其二を志つて
 物の名さへ 悪の厭ふがゆへ 聖の勝母の名を聞く 其里

へち入ぬとある。我國近年府中の名不忠の音の通
むる小や是を静岡とあつらめらるゝ例もありと理を
述^{せま}て迫^{おそ}りけむバ村長低頭して一深志恐感のいふりい
て命^{いのち}を肖^{なま}へる。さあれが童へ教訓とと促^{うなが}しけむバ太
郎兵工庭前の蓮池へ持参の水車を仕うけて童と
ちと残らば招^{まよ}び此車を互^{あひ}に踏^ふみ水中の魚を獲^とり
とりんが忍^{しの}ぶりかここみあつく夫^おかろるを見ん
太郎兵上上坐の村長小對坐^{あひま}し一夫書^{ひとが}と見ん圖^ずを見
ざれば其人^{そのひと}を見て其声^{そのこゑ}を聞^きざるが如^{ごと}くもむバこれ

我^{われ}業^{わざ}を圖^とふ表^ひして教^しへとて併^あ農^{のう}家^の子^こ小^ち他^た学^{がく}ハ
注^{ちゅう}意^いありとト若^{わか}博^{はく}く学^{がく}び得^えば綴^{つづ}れをまとい泥^{どろ}膠^{こう}
小^ちのからびして都^と會^{かい}へ走^はるべし是^{こゝ}をいんがたぬ小
童^{わらわ}をさけぬと云^いつ又^{また}行^いて見^みる小^ち案^{あん}の如^{ごと}く池^{いけ}の
水^{みづ}干^ひざれば童^{わらわ}を残^{のこ}らむ其^{その}父^{ちち}母^{はは}等^らがかる大殿^{だいぜん}小^ちよ
びあめりて形^{かたち}をたゞし一^{ひと}ツヤ能^よ聞^きべし今^{いま}踏^ふしめし車^{くるま}
いかにしとちの身^み小^ち譬^{たと}ふ池^{いけ}の魚^{うな}ハ学^{がく}文^{ぶん}のたどへる
り水^{みづ}を干^ひす修^{しゆ}行^{ぎやう}のたどへありされば修^{しゆ}行^{ぎやう}を積^つぎ
まは学^{がく}文^{ぶん}の魚^{うな}ハとらむぬものを皆^{みな}車^{くるま}をふむのこゑつて

水のあとへ戻つておろぬのの修行不怠あるが如し吾
さいぜん元へ水の戻つ仕掛をいさせし主との母人哉
曉を語の圖解之をも父の子を誠不愛とるが由へ嚴不
学文をさせしは是成人のうへを思へばありおろす不父
外を務るものみれば家不居て少きを志つて父の苗守
ふに必其子母ふあまを狂惑をい諸藝ともふかたれば
母の愚ふして藝を休せ物を喰せ我俸させしを愛と
おろ人ど是はる子と憎が業あり或は父が子をいし
めんときをば母其中の垣とみりて父のまへを呵る不見

さるごとく打擲手不力を入ざればいよく母の氣を吞
みこし何事も父の前へ母が取るまゝのと思へば習ふ
べき業のあらはば不嘘偽の上手不みればかくれ
忍んでまゐる悪事も終ふの外よりあはれをさる父の
母も驚くといふども薛王の猿の如し此猿といふ昔
薛といふ國の天子大猿を獲て狙引不藝を仕こめと
はれば此猿の山へ入るべしひまも身をもちあへば大
食のさるごとくいろいろ藝をかへば志らる不是非と
ふ教つとさる責殺をとり外をかると云々扱其悪子

母の姑おばあ嬢ぢやうより父ちちをばうとて母ははの志こころをくろくろくが
 斯かくるりてくろくろく母ははの身みを苦くるむるを父ちちよりゆえ
 ゐをさうさせ母はは泣なかこては其理り不ふ伏ふくして心こころを改かる
 哲言ちやくげんをたつととも其子こ不ふいその志こころとさ惡友とまごともあれば
 改心かいしんの清水しみず永ながくはたゆへに又また泥水どろみづ不ふ流ながれこころを学まなぶ
 の魚いさなはとくば一生いっせい惡水あくみづの中なか不ふ游あそぶ者もの多おほけは母ははの子こも
 此圖解こゝろを見みて合点あてんがもくばあるうこ太郎兵工たうらうへいこうが
 水拭論終みづぬぎろんしゆう

太郎兵工たうらうへいこう牌
 孫兵衛活計論 近刻

正服部應賀新著作表題

當世利口娘 <small>二号</small>	虫類大議論上下	日本女教師
正 <small>ふ</small> 限 <small>げん</small> 智恵 <small>ちゑ</small> の秤 <small>はかり</small> 三号	權兵衛種蔣論	洋学古切雀
新製兎美断語 <small>同二号</small>	太郎兵衛水拭論	近世 <small>きんせい</small> の <small>し</small> き <small>れ</small> 墓 <small>かぶ</small>
天上大珍事 <small>同三号</small>	孫兵衛活計論	放言深山鳥
金障三代記 全三冊	市の虎狩	みそとく全男
驕人 <small>まうじん</small> の <small>し</small> る <small>り</small> 篋 <small>かぶ</small>	ニヤアチウ談	和談三才圖笑 全三冊
東京花毛拔 五冊	畑水練	豊年五穀祭 三
青樓半化通 全三冊	轉 <small>ま</small> ぬ <small>ま</small> 前 <small>まへ</small> の <small>杖</small>	大鈍託新文鬼談 三

小社說中發見書林

小傳馬町三丁目

山寄屋清七

大傳馬町三丁目

丸屋正五郎

東

神田須田町

高木和助

神田通新石町

紀伊國屋徳藏

人形町通新兼物町

上州屋重藏

京

濱町三丁目五番地

星野松藏

東西國元町五番地

鈴木勘二郎

大門通浪花町

鶴屋喜右衛門